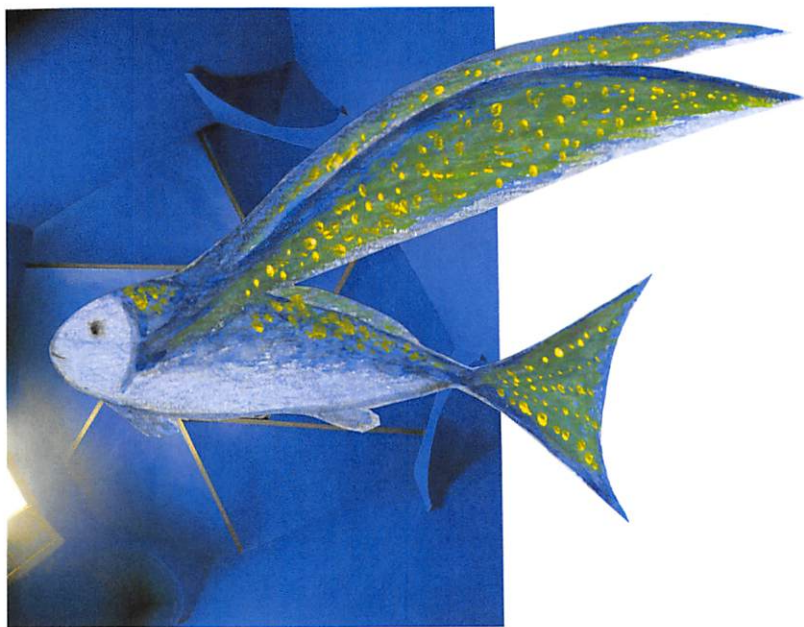


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018. 1



平成30年1月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻第1号

No.716

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してき北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇一八年一月号(通卷七一六号)

◇今月の二十首詠……舟屋

神田鈴子 2

■作品A

奥田清和・奥田陽子他 4

A 赤坂たけ子他 24

B 脇田智子他 56

C 池上久代他 72

A 杉山睦子他 88

■オリーブ集

深井喜久代他 48

◇今月の二人

笠井秀子・大寺智子 20

■西堤啓子歌集「カピバラを抱く」批評

44

感性に育まれた喩の花園

船田清子

シスレーの雲を数えて

田土才恵

◆《特集》写真・歌合わせ

【責任編集】田土成彦 15

安部 律・石澤利夫・宇井秀雄 他

写真……茂木 斌

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文字 54

私と短歌との出会い(185)

中川富美子 23

■歌壇月旦

角川短歌賞の選考から

磯田ひさ子 77

■十一月号作品批評

A……三浦好博・福田庸子

片岡邦子・甲田啓子

B……設楽まゆみ・中原 陽

C……浜谷久子・永田進一

オリーブ集……上林節江・国原喜美子

今月の二人・作品評

久我田鶴子 22

最近の歌誌より

〔編集部〕 107

日本歌人クラブ東京ブロック優良歌集表彰式報告 茂木 斌 71

第66回地中海全国大会(福島大会)のご案内 108

クリップ…… 106

神田通信……表 3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

舟屋

神田 鈴子

はるかなる山の緑を這ひのぼる真綿のやうな雨後のうす雲

雲切れてわづかに覗く青空は予報通りの晴れやかさ見す

をちこちにコスモスの花群れ咲くを車窓に眺むる十月半ば

藍いろの空に浮かべる白雲のうろこの形がゆるりと流る

いくつものトンネル越えたるその先にきらりと光る秋の海あり

空の青、山のみどりを映し澄む海面にま昼の光きらめく

山を背にずらりと並ぶ舟屋あり海面に浮かぶ小さきガレージ

舟屋前しるき小舟に秋の日がまぶしく射せど人影はなし

昭和十一年生まれ。
大阪支社所屬。
歌集に「春の蟻」がある。

時化の日はいかなる思ひに過ごせるや海辺に生くる生活たつき思はる

伊根といふ入江の町に昼たけて人も小舟も眠りゐるらし

高台に伊根湾見下ろす道の駅ひかる干物の溢れむばかり

舟宿の海の幸盛る昼餉どき隣の席に青き目の人

インド人中国人も混じりゐて遊覧船ののどけき賑はひ

鏡のごと光る海面をすべりゆく遊覧船の揺れかすかなり

エサ求め人に馴れたる海猫は遊覧船のめぐり離れず

養殖にタイやハマチの育ちゆく生簀の上を海猫が舞ふ

ま青なる空を映して空よりも濃き藍色に染まる海面は

波荒き日本海に続きたる湾を護るか赤き灯台

陽光はいづくに消えしや五時すぎの空にひろがる秋の夕闇

すみれ色に変はれる雲の浮かぶ果て沈む夕日が余光を放つ

作品



奥田清和

君知るや

・大

小野雅子

コシヒカリ

・羊

君知るや明治読本巻頭の「孝」の教へのまさしき事実

いくさ敗れ敵元帥のひと声に家族のきつな溶けゆく法度

朱夏ま昼古寺の護摩燃え盛るわが出生を知るよしもなし

ちはやぶる神の御前に肅肅と誓ひ申せし佳き日わすれず

ゆくりなく呑み屋の席になじみたる今世の若きカップルの妙

いくさなき町の静けさ銃捨てし若者なせにこころ閉ざせる

気の毒なほどにもあらず票結果なぜかみてゐるわれは何もの

奥田陽子

見る

・羊

朝井恭子

ダリア

・森

草叢を翔び立つ尾長の群ありて草の匂いのはげしき日なり

蛭蝶ひくく来たりてまつわりぬ試歩のひとりに従きてゆく秋

わがままを言う子見ておりわがままを通さず過ぎし幼少期もつ

川に棲む魚を見るひと濁流に流されしかとつぶやくを聞く

いつも見る水禽の姿にあわざるは餌の乏しきか流れはやくて

見る景色異なりながら歩みゆくたえだえの百日紅などゆっくりと見て

夏日となり夜急激に冷えし日に栗風は逝きたり十月のこと

安らかな気持で今日をすすずにはまづ一枚のはがき書かねば

合つてると思ひし時計すすみゐて進めた筈の時計が合つて

孫のため買へる汁椀気に入りてこつそり使ふわれの夕餉に

迷ひしがこの味がよし生協で買ふ新米の「千葉コシヒカリ」

夏を仕舞ふ洗濯物に水色が多し影を落として揺るる

知らぬ間に路を濡らして叢にかそけき音をさせて雨降る

江口氏が出てきてなにか言ひさうな通夜の席なり相模野にして

仏壇の供物柿より蜜柑へと季の移りの色どり明し

亡き夫の名前書きある表札をかかけ茫茫と時を逝かしむ

大輪の赤きダリアを瓶に挿し独り住まいの彩りとなす

「いただきます」「御馳走さま」の己が声一人の卓に空しくひびく

過疎すすむ町の四辻にひがん花赤信号のごとく咲きおり

サイレンも車体も雨にけぶらせて救急車ゆく台風の中

円ら実の連なる莢をあまた下げ槐鳩よび尾長を誘う

飯田 勤 米寿の秋 ．む

生垣に白き花々咲かせたる夕顔の実の風に揺れをり
 満々と水を湛へて澄みわたる小さき池に白雲流る
 建て替への隣家やうやく出来上がり垣根を越えて木の香ただよふ
 マンションへ転居の孫の誕生会手みやげ下げて早々と来る
 久々に家族七人顔合はせ孫等幼き日々を語らふ
 明け方の冷えこみ日毎に深まりて米寿の秋は遠ざかりゆく
 出張の重なる吾子を氣遣ひつつ京都みやげの漬物を食む

磯田 ひさ子 みかん ．森

四国病再発したり誰をか呼ばるる心地に来し秋遍路
 黒潮の海岸線に百余基の津波タワーが新しく伸ぶ
 そのかみは遍路泣かせの清瀧寺災害およばば避難所になる
 後の辺の無人の小屋に置かれたるお接待のみかん黄金の照り
 ほつそりと日本すすきの穂の立ちて遍路疲れの身を晶しくす
 飛行機の乱気流にも大丈夫「お大師さまがついているから」

市原 志郎 病床八 ．萬

高みより見ている街の歩道にはリュックサックの人二人行く
 待つことの長きをかこちうとうとと時過ごしおり待合室に
 診察の終わるをじっと待ちて居し息子よ今日も自動車ありがとう
 片方の眼はまったく見えなくなり朝の新聞ななめに読みおり
 末の孫我をいたわるしくさにて杖取り電気消し前を歩けり
 早や立冬となりし日に我が生を確かめている数時間
 眼帯を少しずらして見んとせしテレビの音の高き今日かな

市原 やよひ 栗 ．萬

いただきし栗にむかごを混ぜ込みてこはん炊けるを夫に告げおり
 栗の香を食卓いっぱい漂わせベッドより来る夫を待ちおり
 にこやかに栗ごはん食む夫の居て二人の食卓賑やかとなる
 無雑作にザック投げ込み孫帰る親の中学生の時によく似て
 声変りしたる孫はただいまの後に必ず言うママはいるかと
 夫と行く病院前の街路樹は今日は秋の金の色して
 文化の日は明治節なり車椅子の夫と空の青さを吸えり

柏原 宗一 鑑真和上 ．羊

わが内にかくたるものなきながら雨は降りつき音のみ残る
 坊津に鑑真和上陸の碑ありとふ不思議はただに思はざりけむ
 鑑真は千年前の人ながらここにねむれるみたま屋の風
 鑑真の願ひはここにあらはれて唐招提寺の萩の色づき
 千二百年の時はず水泡なすいのちは人の伝へることく
 みたま屋の扉のりこえてゆきたけれ鑑真在すおくつきにして
 つひにして茂樹のころろあらはれぬ鑑真ねむる奥津城か嗚呼

菊岡 栄子 旅それぞれ ．漣

姉妹みたり京都の旅に集う友都ホテルに泊まりしを聞く
 小豆島へ収穫祭に行きし友ゆオリープの実を土産にもらう
 小豆島の近未来なる橋桁から島民の生活たっをかい間見しとぞ
 旅先で鼻を骨折しし友に程なく姉の計報入りしと
 開田村の別荘名義の書き換えも無きまま友の姉不意に逝く
 明日より門外漢となる身なる自分の覚悟を友に尋ねる
 身内六人夏の信濃に二泊する歌会へ土産は「雷鳥の里」

菊地栄子 雨

・清

襲うがに夜も出てきて直ちにも姿くらまずハエすばしこし
 二本並ぶ桜の一本立ち枯るる眺め佳しくバス停に佇つ
 確かにもコピー取り置きし二、三枚こころに決めて出で来るを待つ
 散り敷きて雨に打たるるさるすべり移りゆくもの時に無残に
 艶やかな桃のくれない幾日を愛でしやすでに傷みはじむる
 ちぐはぐな会話を交わして去りゆける友を見送る立ち尽くしつ
 美術館も博物館も気乗りせぬ家居こもらず憂うつな雨は

草刈十郎

餓鬼大将

・世

目に余るほどに伸びたる雑草を引きてわが家の庭とりもどす
 夏休みの餓鬼大将は捕虫網手に子分らを連れ廻すなり
 さはやかな花氷なれどわが過去は封じ込めたきことばかりなり
 過疎の村の山の分校日曜日しづかに風の渡りあるなり
 少国民といはれずすべてを我慢して過しし幼きころ思ひをり
 巨船めく病院の灯のその中の妻は入院患者のひとり
 敗戦忌マッカーサーのサングラス太きパイプの姿思ひ出づ

國井節子

声

・春

脳の中(MRI)はものを言ふ口の利けない夫の代りに
 突然に声を無くしし老い夫に先生やさしく発声うながす
 失ひし言葉に代るボード板に夫は必死に何をか訴ふ
 いつの日か声の戻るを信じつつオーム返しのリハビリつづく
 一人する秋の夕餉のさむざむし向ひの席に早帰りこよ
 雨風は秋明菊を吹き散らす薄くはかなく白き花びら
 辻さんの庭のたのしみ柿キウイ まるまるとして秋日をままとふ

小泉泰清

秋の深まり

・う

上弦の月の輝く庭に咲く月下美人の白き極まり
 大振りの花を開きし月下美人濃艶にして香り醸しぬ
 日の落ちてうすらひのなか散歩する道辺の草花淡き墨絵に
 休耕に枯れ芦覆ひしみ出づるすだく虫の音惹かれ佇む
 薄穂の花咲くまへのつやもつに握りて湿り深み行く秋
 この秋は雨降り多く紅葉のいろもにこりて散り急ぐはかな
 朝にさめ再び眠る心地良き寝床の温み秋の深まり

河野繁子

小春

・雁

植えぬのに勝手に育ち独活の花蜂をあつめて小春染しむ
 哀しみをまるめて捨てる川の辺は銀に波うつすき穂の土手
 かなしみを捨てても汚染されぬ水青鷺一羽佇みている
 冬は夕夏は明け方オリオンの位置を確かめ過ぎし歳月
 ミサイルの飛ぶルートまで名指しされ心に折り合いつけての夕餉
 今月の歌の出来たる安らぎに止まる蜻蛉ミサイル知らず
 一人っ子政策いまや結婚の出来ぬ事情を追いゆくテレビ

小西美智子

台風

・大

洗面に髪のひとつし落ちたれば今年の秋も近づきており
 住衣食の語順うかびぬ夕刊の雨の予報の百パーセントに
 サルビアのあかき残花のぼつぼつと強まる嵐の窓越しに見ゆ
 雨戸打つ大きな音に目覚むれば丑三つ時を台風の過ぐ
 青きまま吹きちぎられて銀杏の葉わか死にのこ枯葉に混じり
 庭木木の茂るにまかせ表札の文字のみしるし人けなき家
 素直なるいのちうつくしすんと水仙の芽の直ぐにのびいて

小林能子

山下公園

・羊

マラソンのコースは海風のポイントに「赤い靴はいてた女の子」像
運命を問ひかくるかにブロンズの少女は見つむ 鈍色の沖
アメリカへ行く夢叶はざりし子の見つむる沖を曳き舟が往く
大栈橋に銅鑼響くときブロンズの少女を縛する重き「赤い靴」
昼も夜も海を見つむるブロンズの台座に占むる哀しみの嶺
複製と知れる「青い目の人形」に会へば甦る昭和の記憶
居留地をつくりし異人異国への夢か「赤い靴」の情緒といふは

近藤 栄 昭

三斗小屋温泉

・福

山友の退職記念の那須登山先頭に立つみんな老いたり
谷底にかつて宿りし小屋の立つ懐かしいと思う昔の馬力
「延命の水」滴りおれば小休止長生きの術と共に飲みたり
標識に目的地となる現在地湯宿は見えずおーいどこだ
早晩に電灯とぼり急ぎ食息吐を止めて靴ひも締める
代替わりありたる煙草屋四十年後電灯ついて八千五百円
飛び地といひ領地を広げん三斗小屋納税先は生まれし村と

近 藤 芳 仙

里 山

・信

里山をもりあがりきて物を言ふ文月の雲よ急に恋しき
里山はいつも私の道標 道とほくきて里山を見てゐる
良きにつけ悪しきにつけて母親の思はるるなりこの確かさよ
戦争を憎むとつひに伝はざりき母は大八車に米俵をつんで
草いきれ激しきなかの葬にてひまはり大火花咲かせたり
畑の面の草をひきつつ塗れるる土の親しき年年しるし
言葉などいらぬ今宵の大火花火ゆりおこされて心がをどる

坂 上 直 美

垣田内科

・天

転居してもっとも近き内科医と行き初めて馴るビルの二階に
ミニチュアの提琴医院の窓にあり真夜に小人の来て弾くなるか
ミニチュアのヴィオロン・ギター・ドラムセット真夜の病院ききに行かなん
オキーフの大なる版画壁にあり垣田病院院長寿を勧む
その父も医者なりという温容な垣田内科医われと同年
男ならわれも負けじと思ひしか垣田内科医洛屋・京大
「大丈夫異常ないです」ドクターの一言を聞く外は快晴

坂 出 裕 子

ひがんばな

・洛

光りつつ流るる水におのづからころやすらふもうすぐの秋
ひがんばな咲き初めたるを見上げをり川の中州に立つ鳥の子が
いつまでも立ちつくしをりこの花をはじめて見たる鳥か動かず
こんな花みたことないよきれいなと見上げてをりぬ鳥の子供が
咲き初めしひがんばな見る小鳥あてそれを眺めてゐる親の鳥
すきとほる水の流れにしるとり親子たたずむひがんばな咲き
ひがんばな岸辺いつばい咲く秋のもうすぐ来ると水がささやく

佐 久 間 辰

日乗(六)

・湾

これほどにわれを包める妻が居る女菩薩のやさしき心に
何も無いわが歌作りの生涯に妻も寂しき苦界の一世か
雪しとど今朝の四界の美しさこれに包まれたしこの後もまた
もう誰も頼る人など無き今は自力に悩む愚か者たれ
思おえば歌を作りて七十年卒寿を越えて今に憐し
愚かさを今に知りたりただただに夢想し続けしわれの生涯
身につけし全てはわれの何ならんただ生きて来し旅人ならんや

佐藤道子

山住み

・甲

「このあたり熊が出ました」張り紙も熊も告げるか人に会ふぞと初卯朝採れ地場の夏野菜至福の生活長野の山は

浅間山望む芝生の日向ほこ白雲光る昔の大空

どんぐりがはじけてこぼるる庭の秋リスさん食べてよ残れば林

台風の過ぎし朝の屋根の上どんぐり拾ふリスの足音

森の中かんの迎へ火きらめきてこの山荘に來ますはどなた

迎へ火に遠き昔が戻り來てゆかたの若き父が笑みます

椎名恒治

枯薄

・橋

ふりかへる道は穂波の奥に消ゆ齡九十四年経たりし思ふ

わが背丈越えてゆらく薄の穂十月二十二日雨なり投票日

週二日ケアサービスに運ばれて幼児のごとき運動をする

老いの肩たたき合ひてイッポン足ヤマダのカカシミノカサツケテ

休肝日明けたる朝餉にオンザロックなどと羨しき話

いくたびも小用に立ちぬ老いたりし我に夜はつくづく長し

わが団地の空に大き鉄の爪振り下ろす如隣のマンション工事

鈴木結志

古典に学ぶ

・福

アンドロイドイメージガールの生るる世に未だ筆執り古典に学ぶ

大和かな交じえ変化の構成に筆意利かしてちらし書きする

「高野切」書に心眼を養うる書風の粹を得たき思いに

筆の技究竟の域にいたらねど己が育み捨てぬ一念

神靈のやどる思いや大和かなかきゆく節度みずからに得る

自在なる筆致「黄庭堅」の書に目ははや宣りて心技得んとす

適勁の趣たう運筆の「鮮于樞」書にひかれ筆執る

世木田照比古

連翹

・茜

万歳に妻を相手のハイタッチカーブの連翹をテレビで祝う

忘れまじと大事に取りしメモの意味二日経たればさっぱりわからず

墨の香の染みたる部屋にいただきし秋果ポポーが強く匂いぬ

甘え方を覚えし幼が頼寄せて「じーじだっこ」と我に寄り来る

激しさで意見を通す不合理は幼の世界のみにはあらず

陽の当る所へ出ようかバス停に秋の冷気が微妙に流れる

生き物の予知能力か台風前汽水の面が小魚で埋もる

関根榮子

洪柿

・埼

公園に遊び疲れし児が二人ベンチに独りのわれに寄り來し

あの雲はソフトクリームみたいだね駆け去り乍ら口々に児は

洪柿の皮を剥きいる半時も夜なべになしし母を想えり

洪柿は何故か豊作干柿にすると剥きたる二百個あまり

予定して予定に如かず今年また古代蓮咲くを見逃がす

刈り取りを目前にして台風の去りたる跡の水漬く福田

目の病の色分け出来て白、黒、緑、紅もありわれは黄斑変性

関根和美

銀彩陶

・埼

いかほどの時流れしや那珂川の山ふところに窯をひらきて

うるわしき夫妻の恋うる氏郷は戦国一二の美男とぞきく

早逝の氏郷をみとりし右近よと列福記念の個展に招かる

大谷石の重厚さに建つ松が峰教会に近き美術画廊は

ひと房のぶとう大きく彫る皿の銀彩ほどこすかがやきに触る

銀粉を漆状にて塗られしは陶器の柔に銀のぬくもり

紅葉のひと足はやき山里の幾枝はふたたび花器に火をさす

高尾恭子 秋

・大

塵屋の柿の木末の空あおく百舌鳥はちよんちよん尾羽を振れり
 膨らんだ胸に孤独をためこんで空を裂きたりモズの高鳴き
 病室の外は季節が動くらし背の丈こえて秋桜さやげ
 浜田氏の蘊蓄ゆかし満ち欠けに二日の誤差とや今宵の名月
 二桁の引き算できぬ母の脳のさくら花びら画像に霞む
 「きのう家に帰った」可動式ベッドの母はワープするらし
 水晶の連珠ふるふる揺らしつつ柚子の小枝に雨降りやまず

高津砂千子

転ぶ

・風

一瞬のできごと夢にあらずして両手両膝したたかに打つ
 転びしが即立ち上がりスタスタと歩き始むる痛みかまわず
 乗り換えて辿り着きたる三滝寺ゆっくりなれど正座ができる
 四時間後帰宅し膝を消毒す皮膚のはがれて血糊つきしを
 「小難は大難防ぐというからね」かの人の声よみがえりくる
 朝五時の中空占むるオリオンの星のきらめきたなそこに受く
 坂道を曲がれば一面コスモスのピンク揺れおりわが生まれ月

高橋和代

世情怖るる

・桃

相手の意を汲むこと知らぬ者ふえて此をと思ふ事件のつづく
 羨する事をはばかり世となりてこの様な事を為出かす輩ら
 親の顔見たきと思ふ事多しこの先ぎきの世情怖るる
 まさかの害 余命少なき身に無くも孫や曾孫の時代はいかに
 教育者の子ゆゑと特に羨けられこの齢まで真面に生き来し
 待合室にスカート穿くはいつも独り戦中のもんべ姿思はるる故
 休診の日は当番医を調べ置き新聞読むのが習慣よ久し

竹下妙子

秋のいろ

・霧

秋ふかき日のいろならむ伸び立てる泡立草の黄の風中は
 列なせる泡立草のそよぎあるひとりの歌をうたふ秋風
 風の音に囁き交はす樹々の声霧島連山越えてゆきたり
 鳥の運びし種子にけらしも深谷に輝くばかりの山柿の朱
 時遅れ生れし秋蝶陰に咲く野菊のかたへに震へてゐたり
 石榴木の空に伸びたる枝先に今し緋の花ひらきそめたり
 ざくろ木に触るるなかれ棘もちて弾けむとする朱の実もつゆあ

田土成彦

涙滴

・宙

いかほどの爆薬抱きふるならむ軍艦二隻影のごと泊つ
 漆黒の涙滴として泊てゐる窓一つ無き潜水艦は
 古色然として魚雷用起重機の鎖は錆びたままに垂れゐる
 波止場横ガードのしたに靴磨きゐる少年も古稀過ぎてゐむ
 少年の口笛聞こえさうな夜は波止場だまりの灯り眩しい
 地下ホームから一〇五段上り詰め出でし地表の夕月夜かな
 足の爪きらむとすれど前屈の角度思ひのほかままらず

田土才恵

金婚式

・宙

繋がる歌の縁に生きてこし二人三脚細きこの道
 振り返る一本の道五十年はやも過ぎたり浪速に生きて
 金婚式ついに迎えぬ濁り酒猪口一杯に手料理並べ
 孫子らに包まれゆるゆる生かされていまあることの不思議をおもう
 五十回記念日来たり新たな一歩の朝始まらんとす
 じんわりと手脚伸ばしてストレッチきょうの一日もつつがなくあれ
 置き忘れ来しもの探す思ひして過ぎ来し年月ふとも思えり

虎谷 信子 入院

・伴

あお瘡ですぬすぐとりませう。促入院 医師の宣告おろそかならず
まあいいか九十すぎまで賜びし命、先生よろしくおねがひします
いねられぬ秋の夜長よ、右胸のキズアト撫であつ そぞろ哀しも
入院も三月に及び リハビリの日もせつなし。わが身の衰へ
病窓より見下ろす夜景 万博あと。殊更明るし、遊びし日のこと
背戸の木せい花どきすぎぬ家猫をいだきなでつつ吾家はよろし
大鳥 熟れ柿喰みてとび去りし、後小鳥たちさへづりついはむ

中島 央子 風

風

・森

魚沼の田の面田の面の黄金色軽トラが行く風が追ひゆく
ハマナスの終の一輪冬ちかき広ぐる雲の下にうごかず
人をらぬ池のほとりに呆と坐す晩秋の風すべりゆきたり
うなじ過ぐる高原の風秋の風なるやうになるとわれを励ます
十月の雲の広ぐる空を突きポブラの緑垂直に立つ
西よりの夕への風に雲ながれ藍ふかみゆく越後三山
今日の日の出合ひ尊し友と酌む越後のくにの冷酒「緑川」

中島 義雄 闇に匂ふ

闇に匂ふ

・岡

夜の闇に朽ちし無花果匂ふなり身に相応しき終末は来よ
悔しさを返す思ひのまだありて闇に茗荷の花が香りぬ
雨つづく庭に明かりを保ちるし石路の花褪せて立冬
石路の花褪せて冷える夕庭に野良猫が来て憐れみを乞ふ
今際なる妻が額に留めぬし艶まがなしく雨の石路
片栗粉浴きて舐めぬる無胃食の私の昼餼に猫が擦り寄る
逝きし妻の未来に生きて焼き蒔の熱きに笑ふ幸せを持つ

萩 葉子 緑の缶

緑の缶

・銀

とっさには思い出せない吾亦紅一番早くあえるのは何処
へアピンの先が丸くなっているひとつ結びの後れ毛とめる
なんとなく声聞きたくてとふるさとの友の電話に温まりいる
鉛筆が物語るさまに転がりて「お菓飲んだ」と問いかけてくる
今日からは書きかけの稿ノートなど緑の缶に入れると決めし
秋茄子を半月に切り塩をふりぎゅっとしほりて一味ひとふり
玄関にて「いってらっしゃい気をつけて」いつも同じ言葉で見送る

白子 れい 瀬戸際

瀬戸際

・洛

ツイツイツイピーしき啼く声に耳奪われころいっしか自然と遊ぶ
庭隅の土あかるめり金木犀の小花ほろほろ風なきに散り
夕暮るる空にほっかり白き月大きくうかぶ今宵満月
まっ白の雲の作れる川に泛きかがやき放つこの月の月
若き日と交らぬ聴覚もちおりて耳ふさぎたくなることの増ゆ
寂しきという暇もたぬ日々なるもふつとこころを過ぎるものあり
瀬戸際にきたりてあわてて見直せり残り少なきわれの一生を

ばばりようこ 残響

残響

・鹿

ひと部屋をひとり占めせしグランドのピアノとの別れ黙しあうふたり
惜別の思いを込めて花束を積年の同志としピアノへ捧ぐ
眉あおく染め上げきみが弾くシヨパン葬送曲とし耳に哀しむ
哀しかろう切なからう辛からう五十年來のピアノと奏者
クレーンにて持ち上げられ降ろされて柩の如く運ばれてゆく
カラヤンの等身大の指押さばきのパネルからまたたよう別れの曲の
三本のピアノの足跡くつきりと床にくぼみて残響なせる

浜谷 久子

月見酒

・地

月見酒届く中秋今年また会うことのない時が流れる
夏草の蓬けて種を落とす季を懐かしい人の声が聞こえる
入りつ日に背を包まれて帰る道子の頃歌った「ひと日の幸」と
静けさのなかに漂う無の香り臍腑に吸い込み歩き始める
取り戻す静けさ一人に還るとき一人ではないこと思いつつ
若き日の宿題掲げてとる齡飛び込んでくる幼らの声
三人の笑顔とやんちゃの満ちる日の秋風春風めまぐるしくも

浜本 芙美

郷愁の譜

・夢

花のなく濃翠ふかき一樹たつまろまろしき実を点描として
歩道の辺雑草の中ネコジャラシ何を招くか郷愁の譜
プチカード記して渡す当てのなく笑顔よろしきおみなにゆずる
「白露」とう今日まだ麻のブラウスを着ており地球どうなっている
切り込みし紫陽花にはやはつはつと新芽のみえて長月の風
窓などに使う言葉の嵌め殺し何かさびしき韻きをもてり
愛情の果実と呼はるるトマト一つ白磁の皿に納まりていつ

檜垣 美保子

ほろ酔い

・昴

問われたる事の次第は抜けおちてしどろもどろの白のこりたり
「兄の木」と呼ばれし栗と「弟の木」と呼びし柿 段段畑
金網のフェンスをへだて立つ二本金木犀の香のさかりなり
正面に昼の月ありさにあれど月とはどこか呼びがたきかけ
柳橋ほろ酔いの夜自転車を押しつつ帰る西から東
おとうとの低き声音をききおわり霜月の夜さらにしずもる
すすき原穂の闌けており風吹けばいっせいに風の道へたびだつ

福田 庸子

雷電様

・今

刈りあとの田の土突つく影ひとつ鳥は我の日とつらなれり
村あげて落葉さらひし背戸山は黒木と代はり人は入らず
山ちゆうが明るかりきと語りゆく長屋門の主は腰を伸ばして
氏神様雷電様を背戸山に長屋門の壁まぶしかりけり
農地開放に山のみ残る月日経て屋敷の前の菜畑に立つ
ガビチョウもアメリカザリガニもしたたかに日本に子孫を殖やし続ける
一〇〇キロに追ひこしてゆく軽四輪過信の姿はこの国と似て

藤川 和子

いもうと

・眉

秋の夜の更けつつ孤独は身を刻む葉月八月いもうとと去ぬる
十五夜の月天心に澄み透り射すくめられてこの世にひとり
里山の秋のほひのいづくより紅葉狩りせしきのご狩りせし
初柿は青味を帯びてスパーに山の猿柿色づくころか
ランタナの花に纏はる秋の蝶真陽に廻るよまはれ万華鏡
手をかけず(へ時)はしらじら道の辺の地蔵の目鼻無きまでこぼつ
絶景のカナディアンロッキアあかときの画面に老いの命いきづく

藤田 美智子

林檎の木

・新

雲厚き夜を安らぎるならむ光り続けてきたる星たち
「林檎の木は雨が好きな」果樹園を営む友のやはらかき声
かかはりを断ちたる寂しさに耐ふるべし雨にぼろぼろ萩の花散る
音立てて柿の実は落つ熟したる重さたうたう泳へきれずに
人間なら初老あたりか刈り小田を一羽のからすがゆつくりと行く
神籤には待ち人來たらずと出るならむ傘差しるるに肩の濡れゆく
劇の主役を演じ終へたる少年の額に頬ににきび増えをり

船田清子 稲の香の秋 ・天

北よりの脅威にあらす涼風に乗りて来たるは稲の香の秋
金風の擦れ合ふ音かと耳立つにあれば?こほろぎノ今年の初音
一夜さの雨に生るるや幼かる音を懸命に長月なかば

羽根の張りひだり一日にはやも調ふやさやかなる音にピリリリリリ
四五日を氣負ひたりしが翌日は失意の音にやさまよひめぐる
照る光もコンクリートの庭に枯れ憫ふ月夜のおをきゴビ・タン
ボンネットに黄に光るあり怪しみて仰ぐ軒端に掛かる十六夜

牧 雄彦 ナーガ(蛇神) ・大

マンゴーの樹の葉は高く生ひ繁りあはひを朝の風が抜けゆく
金いろに光るナーガの屋根飾り青空突きて葉の上に見ゆ
ナーガを伝ひ神が降りくるときあらむ伽藍の朝は静かなりけり
本堂に巻かるる青と白の布葬りならし読経は絶えず
バナナの木の根方にひとつ蝶が舞ふ逝きたる人の魂かも知れぬ
昨日の荅がけふ開きたりバナナの花淡きべに色ふつくらとして
をさなごは少女となりてブランコが庭の木陰に捨てられるたり

松浦 禎子 屋島 ・羊

薪能実行委員長の斉藤氏麻の単に風ふくませて
大導師貫主につきて相共に低く奏する般若心経
平間寺八百九十年に奉納す観世薪能仕舞の「屋島」
身代りの継信最期も能登殿の最期も八百年を伝えて
紋服の素のまま激しき修羅場の「屋島」に一陣の火の粉あがりぬ
「屋島」舞う観世芳伸の頭の上を夜鳴き嘯太一羽すぎゆく
若き日の父の地謡なつかしむいっしかわれも傘寿を越えて

松永智子 十七夜 ・嵐

呼ばれたるごとく目ざむるあかとき 雲なき空の十七夜の月
蒼くして十七夜の月高くして星ひとつありおとうと逝けり
別れのことばなきままととうと父に似るその首またほそし
しろき骨簪にひろへばかさかなり おとうとの残す終なるひびき
さりながらさりながらを言はざれば問はざればただ空たかくして
星たかき夜の高速道おとうとの葬りののちの目に仰ぐなり
ふりむけばとほき日のごとおとうとの笑みありされど触るるに非ず

三浦 好博 目くらまし ・鈍

聞こえ来るは「愛の夢」かと思ひつつ歩け歩けの秋の夜の街
金婚の二人の宴に鮎を食むこれより生きるは死に向かふこと
新聞の大事なところに印しする事は天国からもできるよ
それぞれが一人になりて長き夜の詩吟の声とオカリナの音
新聞の保守勢有利が目に入りつ今朝はリストの「ため息」聴きつつ
最高の印象操作と訝れど「Jアラート」に反応したり
目くらましに騙され易き我にして手品のごとき我らの政治

宮本 靖彦 飛驒の旅 ・凌

露天風呂の湯気すかし見る高山の町の灯りの増え著し
鉢巻の若衆の曳く町屋台汗の滴り鈴の音高し
数千の視線見つむる高山の布袋屋台のからくりはじまり
鯉およぐ町川に沿ひもとほれば雄松の高し飛驒円光寺
飛驒古川の三者詣れば暮れ深く紫紺の空に一番星見ゆ
有難や 娘夫婦と奥飛驒のロープウェイに楨、穂高見ゆ
遠近の山濃く淡く暮れそめて渋滞に見す魁夷の画風

三好 聖三

やれやれ

・伊

またしても口内炎の予兆だぜチヨコラBB呑んで眠るか
政治家が口にするとき腐が匂う愚直あるいは謙虚・誠実
言の葉をひとつ飲み込み黙したり語らうことの虚しくあれば
〈生きるとは朽ちはてること〉という詩句を黙読しつつ食む富有柿
神田までプレヴェール詩集を買いにゆく失くしたものを補うように
真夜中に飼ひ猫の餌を買いにゆくマローウ君はネクタイを締め
ころつきは部屋へ帰れと妻が言う〈刑事ゆがみ〉はひとりて観るか

御代田 澄江

ICANノーベル賞

・茨

若布浸すに汐が匂ひぬ海が香る南三陸のわかめとぞ言ふ
月一回の息子のドライブ二十年間同友と続く今月は千葉から群馬温泉巡り
話題なるシルバリーハビリ毎日の行住坐臥即りハビリならむ
敬老会に初招待の八十歳笑顔に挨拶の隣人同年と知る
ICANとふ国際NGOがノーベル平和賞感動なるもわれらの政府は
台風の余波なる白南風猛猛し熟れし紫蘇の実著けく匂ふ
米国と同盟国よ怯むなと戦時兵士を鼓舞する言葉を(米大統領)

もとむらしげと

教師退職

・そ

新任の教師たりし頃遠き遠き未来でありし退職の日々
鉄や木や石とはちがふ人間と向き合ひて三十五年過ぎしき
夜更かしの熱意もすべて空回りわが未熟さを噛みしめ帰る
言ひ訳は言はずと決めて夜九時に玄関前にて記者に答へき
軽々に人の仕事は批判せぬ深き苦しみの果てかも知れず
先輩を迎きみし頃を懐かしむいま新人の授業を見つつ
わが前にややかしこみて座りたる青年教師の頬紅潮す

八乙女 由朗

山上平和観音

・柴

山上の本丸跡に登りたし上求菩提のまなこ開きて
鳥となり子は飛行機の操縦士俯瞰の平和観音われは
訪ぬれば空きの電車を動かして運びくれたり山上の駅に
山の一角ブルが土掘る姿見え観光用の墓あらぬなり
要塞の地の利残れる頂に戦後立ちたる白衣観音
限りても奥に立つかも観音の背が見えてか本木定子よ
四方山の本丸跡に佇むに近づくなりぬ俳人二人

山下 雅子

小さき指

・習

歩行者の専用ボタン押せる児の小さき指がバスを止めたり
しなやかにしたたかにしてつややかに生きよその声遣言となりぬ
ためらえと言わねばならぬことあり積乱雲はみるみる育つ
原子炉の初稼働せしその年に生れたる娘還暦となる
うっとり聴く「菩提樹」にふとよぎるベクルレ・シーベルト忘れておらぬ
領海など知らぬ鮭なりスパーにノルウェーロシアチリ産
ドクターは「放射線をあびるかね」わが痛む足なでつつ言えり

横田 敏子

観覧車

・福

朝の空真青に澄みて冷気ありとんぼ一びき棹に動かす
笹船の笹を広げて作りたる笹舟流す小川もあらず
いつの日か乗らんと見るたび思いたる観覧車いつしか姿を消しぬ
安達太良を遠景としてゆったりと回りおりしよかの観覧車
夏の日の火点し頃の観覧車にいつか誰かと乗る夢も消ゆ
夕焼けを飲み込むようにゆうゆうと巨大鯨雲泳ぎゆくなり
見えねども滑かに風の通りゆくコスモス揺らし想いを揺らし

吉内尚彦

案山子

・浜

あれやこれ遣り残したるこの夏の暑さも過ぎて秋桜の波
 お悔み欄天気予報のほかは皆ななめに読みて今日が始まる
 風無きに次々と散る紅葉にわが人生の秋を知らさる
 河川敷に政治家摸して右向きや左向きなる案山子が並ぶ
 朱赤の絨毯散り敷く落ち葉の上落ち蟬一つ桜樹を見上ぐ
 彦根城の堀の白鳥羽根切らる か的美女縛る結婚制度
 いちめんの刈田の上の青き空ミサイルなんぞ飛び来るなかれ

吉永惟昭

時雨

・熊

霜月の風や慮外傷深し無情時雨となりて続くも
 台風に添いきし時雨そのしじまふみ啼くかに山鳩の恋
 大匙に三杯半のヨーグルト 時雨でよかった今朝の贅沢
 時雨色 浮き出する葉 彩鮮か 野生に掃せし猩猩木の
 縦断の台風一過付度もしとどに滯るる時雨選挙に
 平成の時雨は物を思わせず紅二点まで同じ内閣
 残照の宙に円な十三夜誘いくれにき女の面影

久我田鶴子

疎かならざる

・羊

言ふほどの師弟関係ならざれど〈破門〉ひとたび軽き口調に
 偶然はいつか必然 出会ひまた次なる出逢ひに繋がりしさへ
 終の日の近づくなかの返信に震へ抑へし文字を刻める
 死亡通知リストに挙げられるしことの疎かならざる縁といはむ
 老いてなほ甘いマスクのひとなりき棺の顔にはまみゆるなさず
 孫思ひの好々爺なる人いよわが知らざれば香のみ手向く
 地中海、香川進に触るるなき通夜にならびて別れをなせり

二〇一八年（平成三十年）を迎えて

二〇〇八年から現在の編集態勢になり、十年が経ちました。
 提案はあっても実際にはなかなか踏み切れなかった企画も、少
 しずつ実現させられるようになってきたと思います。

「写真・歌合わせ」「地中海の歌人・検証シリーズ」、インタ
 ビューや座談会。創刊者である香川進については、『香川進研
 究Ⅰ』『香川進研究Ⅱ』として、形にすることもできました。
 現在は、沖繩を詠い続けた歌人・桃原邑子の歌集『沖繩（新装
 版）』の発行に向けての作業を進めています。香川進と共に
 「地中海」を担った山本友一についても、やがて何かの形に残
 りたいと考えています。

そして、現在の「地中海」にも素晴らしい才能が潜んでいる
 ことを感じつつ、それらの才能が生き生きと作歌できる場をつ
 くっていきたくと意欲に燃えてもいます。「地中海」の創刊理
 念は難しいかもしれませんが、それだけにそれぞれが考える余
 地を残し、追求する価値のあるものと思います。よき歌を作っ
 ていきましょう。

今年もまた、短歌の大海原に漕ぎだしてください。

●地中海・実務委員

・編集部：◎久我田鶴子・○磯田ひさ子・○関根和美

朝井恭子・市原志郎・奥田陽子

高尾恭子・田土成彦・浜谷久子

檜垣美保子・藤田美智子・三好聖三

・総務部：◎藤森巳行・○小野雅子・茂木斌

永塚節子（◎会計）・大浪美雪（◎会計）

・監査……佐久間晟・牧雄彦

・顧問……椎名恒治・柏原宗一